日本医史学雑誌第三十二巻一号
昭和六十二年一月三十日発行　昭和六十年九月二日受付

池田謙斎伝補遺

長門谷　洋　治

『日本医史学雑誌』第二九巻第四号（昭和五八年）に堀江健也「池田謙斎（一）――初代東京大学医学部総理――」が登載（四二八―四三四頁）されている。本稿は（一）とあるように（二）以下が掲載さるはずであった。しかし著者堀江健也先生にはその後病を得られ、昭和五八年一二月一四日死去された。著者が（二）以下にどのような構想をもっておられたかについて第三者である小生が知ることはもとより困難であるが、（一）において〈はからずも謙斎の御子孫の方々と御交際願えることとなり、しかも謙斎の実子高崎斐子様が小生宅に甚だ近くお住まいになり、お互いに往来することが出来……〉とあり、また〈謙斎について現在まで詳しく記しているのは大正六年に入沢達吉が発行した「回顧録」である。（略）これは口述の形式で記してあるので要約し、また、第三者的に追記しつつ記してみよう〉とあるにより、著者の意図が推察されよう。なお、堀江先生は昭和五一年より七年間にわたって『練馬区医師会だより』に《医学の散歩道》（一―九一）を連載されたが、その七八―八三までの六回が「池田謙斎」（以下この両稿を堀江論文という）であった。

昭和五九年一一月、故堀江健也君遺稿『医学の散歩道』刊行会より『医学の散歩道』が刊行されたが、そのさいに中心的な役割を果された古川明先生が、上記『練馬区医師会だより』の池田謙斎の項の別刷を小生にくださるとともに、堀江による池田謙斎についての論文を前記遺稿集には収録しなかった、ついては小生が続稿を書いて『日本医史学雑誌』に投ぜよとのお話があった。小生は池田謙斎について従来関心もなく、とくに研究したこともないので大いに当惑したが、他ならぬ古川先生のご依頼であるので非力を承知の上で、この大役をお引き受けすることにした。ただし系統的に記載する能力はないので、補遺的に数個の点についてのみ言及したに過ぎ

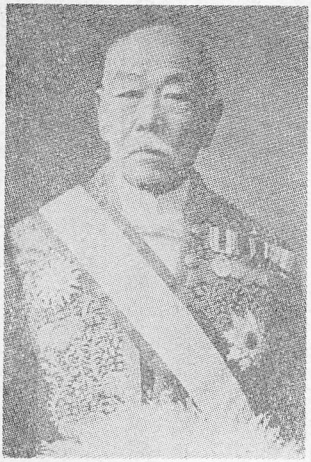
ない。

なお堀江先生（以下堀江）は、池田家一族のかたが企画しておられる伝記の編集をお手伝いしたいとされていたものの、思わぬ当人の死亡でそれは不可能になった。しかし池田家ではその後も謙斎伝の編集に努力され、近日中にはこれが上梓されるやに聞き及んでいる。同書の内容と拙稿とでは当然重複する部分も多いと思われるが、お許しを願いたい。

池田謙斎の訃報

池田謙斎（一八四一―一九一八、以下原則として謙斎）については堀江論文に詳しいが、その要約的なものを別途につかみたいと考え、まず当時の訃報一、二をみることにした。最初に『大阪朝日新聞』のそれであるが、大正七年五月一日の第二面に写真入りで報じられている。

池田謙斎男　池田謙斎男は三十日午前九時頃薨去したる由にて一日東京にて喪を発すべしと。病気は血管硬化症にして危篤に陥るや位一級を進め正二位に叙せられたり。



〔写真1〕池田謙斎（大正5年）

池田謙斎男病気危篤の趣、天聴に達し三十日午後病気御尋として葡萄酒一打を両陛下より御下賜相成りたり。

男は新潟県平民故入沢健蔵の二男にして夙に洋学を修め、緒方洪庵の門に学び、後池田秀真の養嗣子となり、元治元年幕府の命に依り長崎にて医学を修め、明治三年普国に留学を命ぜられ、帰朝後十年東京帝国大学医学部（筆者注　正しくは東京大学医学部）総理、十九年侍医局長官、三十年陸軍一等軍医正となり、三十一年男爵を授けられ、三十五年宮中顧問官に任ぜらる。家族は長男秀男（四十八年）外八名の子

女あり（東京電話）。

『中外医事新報』（大正七年　六一八頁）は、

池田謙斎氏薨去　宮中顧問官陸軍一等軍医正従二位勲一等医学博士男爵池田謙斎氏は、予て腎臓炎に罹り、大森の別邸にて入沢・高橋両博士の治療を受け静養せられつつありしが、去月三十日病大に革り同日午後九時薨去せられたり。恂に衷悼の情に禁へず。（略）

『東京医事新誌』（大正七年　二〇七三号四二頁）は、

池田男爵の薨去　宮中顧問官陸軍一等軍医正従二位勲一等医学博士男爵池田謙斎氏は、去る一日午前九時宿痾脳溢血再発の為、南郊大森の別邸に於て薨去せられたり。享年七十有八。（略）

とありさらに次号にて、肖像とともにその葬儀の状況と略歴について報じている。ここで気付くことは三記事中死亡時刻が四月三〇日午前九時、同日午後九時、五月一日午前九時と異なっていること、および死因ないし病名が血管硬化症・腎臓炎・脳溢血と異なっている点である。

謙斎の碑文

謙斎の墓（谷中墓地）の碑文は入沢達吉が記しており、これを堀江が現代訳しているので抄出引用する。

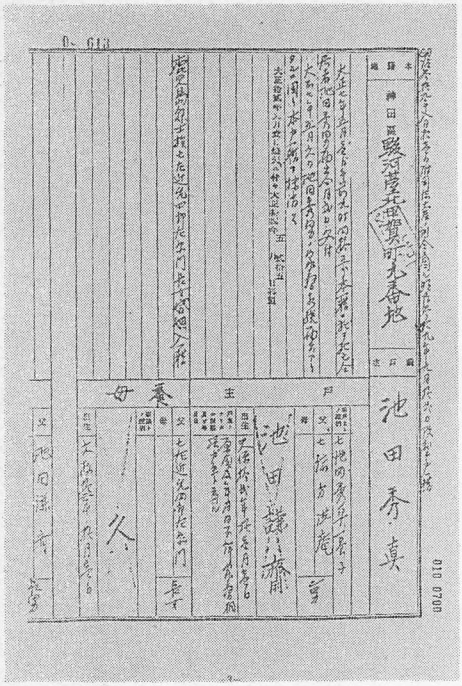
私（達吉）は幼くして親をなくした。一二歳の時である。そこで東京に遊学し、謙斎の家に世話になった。私は先生に師父の恩と叔父・甥の親しみを有するものである。謙斎の本姓は入沢氏で諱は秀之、幼名は圭介、後に桂太

郎といい、謙輔とも称した。越後の蒲原郡西野の人で、父は健蔵といい、二人の子があり、長男は私の父で次男が先生である。若くして江戸に遊学し、剣を学び書を読んだ。先生が謂うには治国も治病も其の功は同一である。むしろ良医となるべきであろうと、洋法の医学を専攻することとした。そこで幕府の医学所に入り緒方洪庵に師事した。その後幕府の医官　池田玄仲の養子となった。元治元年、幕命により長崎の伝習所に赴きボードイン等に師事した。ところが維新の変がおこり、乱を避けるために上海に渡り、のち江戸へ帰った。戊辰の役には医事に当った。維新となり大学の少助教に任ぜられ少典医を兼ねた。明治三年海外留学生となり、米国を経てプロシャに赴き、ベルリン大学に入り、七年で卒業、帰朝するや陸軍軍医監を拝命し、侍医を兼任した。明治一〇年四月、東京大学医学部総理に任ぜられ、医学教育制度改革、西南戦争には傷病兵の治療に当り、明治二一年医学博士を授かった。同二二年（注、一九年の誤り）侍医局長となる。明治二七・八年の役には広島の大本営に勤務し、功により勲一等に叙せられ、同三一年病をもって辞職、男爵を授かる。同三五年宮中顧問官に任ぜられる。大正七年四月三〇日死亡、得年七八、東京谷中に葬らる。（略）

血縁の一人であり、医史学に造詣が深い当時東大教授（内科学）の入沢達吉になる文だけに信頼性は高い。その入沢が謙斎の喜寿（大正六年）にさいし、編集・発行したのが『回顧録』である。B5判本文五〇頁の冊子で〈男爵池田謙斎口述医海時報社員筆記〉（口授は明治三四年）となっており非売品。本書の現存は少ないと思われるが、堀江は一族からこれを借りて閲している。そして堀江の記述により本冊子を現代訳し、注釈や参考の写真を付してその周知方をはかった先覚がいることを知った。それは緒方富雄氏で、雑誌『医学のあゆみ』の第三〇巻第一号から第四号（昭和三四年）までに分載されている。なお小生は『回顧録』の全コピーを梅溪昇氏より拝借し閲読の機を得たが、これは帝国図書館蔵（現国立国会図書館）のものによっておられる。惜しいことに本書の記載は明治九年、ドイツ留学のところで終っているが、逆に医学所に関することなどは貴重な証言であり、『東京大学医学部百年史』（東京大学出版会　昭和四二年）でも盛んに引用されている。

緒方洪庵の養子であった謙斎

謙斎が入沢家より池田家の玄仲（秀真）の養子となったことは周知のことであるが、池田家の養子になる前に緒方洪庵の養子になっていることが堀江により明らかにされた〔『練馬区医師会だより』登載の「池田謙斎（2）」〕。この情報は謙斎の娘、斐子氏によってもたらされ、その証拠たる戸籍簿のコピーが同稿に転写されている。このことは前述の『回顧録』にも触れられておらず、堀江が緒方富雄氏に尋ねたところ同氏も聞いていないとのことだった由。事実はここに再転写（写真2）したものがすべてであるが、堀江の説明は以下である。



〔写真2〕池田謙斎戸籍

同戸籍によると『本籍地』「神田区駿河台北甲賀町九番地」とあり、『前戸主』「池田秀真」（玄仲）『戸主』「池田謙斎」でこれはバツ点で抹消、すなわち死亡除籍されている。『前戸主トノ続柄』で「亡池田秀真養子」（注、池田秀真は明治五年八月死亡）とあり、『父』が「亡緒方洪庵」となっており、『母』は空欄、下欄には「二男」と記されている。さらに『出生』は「天保一二年一一月一日」『戸主トナリタル原因及ビ年月日』は「原因及ビ年月日不詳、家督相続戸主ト為ル」とある。

この中にはどこにも入沢という名がない。洪庵没後、おそらく未亡人が仲に入り、池田からシッカリした人がいたら是非頼むといわれ、未

亡人の目にとまったのがまじめな謙斎であったのであろう。しかし池田は幕医の身分、入沢謙斎は田舎の村長の次男坊ということで家柄が釣り合わず、緒方の二男（筆者注、洪庵の本当の二男は惟準である）として形式を整えたものであろう、――すなわち緒方の未亡人が気をきかせて洪庵の子としたものと推定される。なお斐子氏によると、謙斎は上記駿河台北甲賀町で成蹊堂という医院を開いていたことがあるという。

ところで謙斎が洪庵の養子となっていたことは従前全く知られていなかったかというとそうでもないようである。前述『中外医事新報』の訃報記事の中につぎの一節がある。

〈夙に洋学を研究し緒方洪庵の門に学ぶ。後同氏の養子となり、更に又池田秀真の養嗣子となる〉

かかる記載が残っているので、このことは本人はむろん、入沢達吉も知っていたと思われる。しかしそのことを碑文にも記していないのはひとつの謎といえよう。なお堀江によれば戸籍が凡そ整ったのは明治三九年で、この戸籍でもその右肩に「明治三九年八月一一日附司法大臣ノ訓令ニ因ル明治三九年九月一二日改製戸籍」と但し書きがある。さらに本戸籍には印鑑で「大正一二年九月一日焼失ニ付キ大正一四年五（月）二五日再製」と記されている。関東大震災は謙斎没後のことゆえ大勢には影響なかろうが、本戸籍にはなおひとつひっかかるところがある。それは上欄の記載で「大正七年五月一日午前九時四五分本籍ニ於テ死亡、同居者池田秀男届出、同月二日交付」とあることである。彼の死亡の日時は四月三〇日（午前九時、午後九時）、五月一日（午前九時、同九時四五分）と種々記載されているが、正しくは四月三〇日の午前九時ではなかろうか。本戸籍には「除籍」の印がおしてある（本籍地欄）。

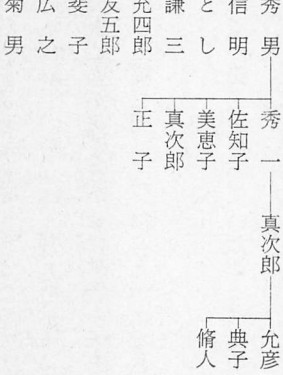
なお謙斎が北條謙輔の名で「適々斎塾姓名録」の六一八番に載っていることは堀江論文に記載のとおりである。ただ注意すべきは堀江も述べているように〈大阪の適塾〉での門下生でなく、東京での入門であることである。

本戸籍には戸主謙斎の左欄に養母久の名があげられている。すでにコピーの時点ではバツ点が付されているが、謙斎が

戸主となったときはまだ生存していたことを示す。彼女は文政一二年生で、死亡は昭和五年、百一歳の長寿であった。入沢達吉が彼女について記している（「久子物語」『現代』昭和五年）。

池田謙斎家系図

堀江論文中にある池田謙斎家系図を簡略化して転写（図）した。謙斎には七男二女があった。長男の秀男も医師であり軍医になったが、謙斎没後僅か半年で死亡している。そのあとを秀男の長男秀一が継いでいる。謙斎の碑文を入沢達吉に依頼したのは秀一であった。謙斎の二女斐子は明治二六年生、結婚して高崎姓となるが、堀江論文執筆の昭和五七年当時はなお元気で、頭脳も明晰、資料の提出・解読などに大きく寄与した。偶然お宅も堀江（東京都練馬区）の近くであったとのこと。堀江に対する池田家側のもう一人の協力者が鈴木才子（さいこ）氏で、港区赤坂、山王病院近くにお住いの詩人、ご主人の保氏は画家である由。謙斎の三男謙三は鈴木亮蔵の養子となり、その子が保氏である。すなわち才子氏は謙斎の孫の嫁ということになる。謙斎の次男信明は子爵安部（あんべ）信順の養子となり北海道に住んでいた。この安部宅に謙斎が留学時に留守宅などへ書き送った手紙や、謙斎あての山県有朋ら当時の著名人の手紙の残されていることが判明し、鈴木氏宅へ移されたのを機に同家を中心に改めて謙斎について関心がもたれるようになり、堀江にも連絡のあったのが、今回のことの始まりである。秀一のあとは秀男の次男（秀一の弟）真次郎が継ぎ、現在の当主は池田允彦氏（小金井市在住）で謙斎より数えて五代目となる。



〔図〕池田謙斎家系図

侍医としての謙斎

侍医としての謙斎について宮内庁に問い合せたところ、侍医長兼宮内庁病院長星川光正氏からご教示いただいた。同氏の「日本の侍医の歴史(抄)」(『東大第一外科同窓会だより』第一六巻第一号　四頁　昭和五八年)より謙斎関連の事項を引用すれば以下である。(なおのちに星川氏が当学会会員であることを知った。不明をお詫びする)。

○明治二年　朝廷は洋医を召して侍医とすることとなり　伊東方成、青木邦彦の両名が大典医として任用された。

○明治三年　大学大助教兼少典医池田謙斎が天皇を小御所において拝診した。これは洋方医が公式に玉体を拝診した旨、記録に見られる初めである。

○明治一六年一〇月　一等侍医伊東方成、池田謙斎、岩佐純等は連署して、書を太政大臣三条実美に上った(東京より三〇里内外の地に離宮・御用邸を設け避暑することが皇子・皇女のためにも望ましいとするもの)。

○明治一九年　宮内省は侍医局を設け、長官に池田謙斎を任じた。

○明治二一年　洋方医池田謙斎を執匙御用とす。この年より侍医は全部洋方医となる。

宮内庁編修『明治天皇紀』(吉川弘文館　昭和四三年)中の謙斎に関する記載の一部をつぎに示す(星川氏による)。

○明治一五年八月四日　頃日御気進ませられず舌苔を生じ、腹部緊満を訴えたまい、時に攣痛あり。下肢倦怠を覚えさせられ両肢腫脹す。是の日、侍医池田謙斎診候し「脚気症」と拝し奉る。よりてその御手当あらせらる。然れども仮床に就かせらるることなく、出御して万機をとり給う。一〇月に入りて全く快癒したまう。

○明治二一年二月二日　侍医池田謙斎拝診して「鼻咽頭カタル症」と拝。

同二月一〇日　遂に「肺炎症」と拝するに至る。

同五月六日　御床払あらせらる。

○明治三一年二月　侍医兼侍医局長池田謙斎退任に際し、特旨を以て謙斎を貴族に列し男爵を授けらる。謙斎侍医局に

奉仕すること二十有余年、天皇・皇后・皇太子並びに皇子、親王等の拝診を勤め、精励能堪の職を尽す。特に英照皇太后の病床に侍して診療・看護最も勉むる所あり。二月二日　病の故を以て其の職を免じ、其の勲功を録して此の栄典を賜り、金一万円を下賜して、家門保続の資に充てしめたまう。後任の侍医局長は岡玄卿。

星川氏によれば、上述『明治天皇紀』のように公表されたもの以外に宮内庁書陵部にはなお謙斎関係の資料もあろうが、閲覧禁止のものも少なくないとのことである。

謙斎の先進性

謙斎の死亡時の肩書き〈宮中顧問官陸軍一等軍医正正二位勲一等医学博士男爵〉はまさに位人臣を極むというか、きらびやかなものである。氏の生涯の中には初代とか第一号とか、あるいはそれに準じるものが多い。その代表が堀江論文の副題になっている初代東京大学医学部総理である。これは現在の医学部長にあたる。明治一〇年、東京医学校と東京開成学校を合併し、東京大学が創立され、医学校は医学部と改称し、その医学部総理（綜理と記されているものもある）に謙斎が就いた。同年四月一二日のことで、同時に長与専斎が心得となったが、同一二年三月五日これを辞し、石黒忠悳が同日よりこれに就き、同一四年七月八日に及んだ。なお医学部以外の三学部（法学部・理学部・文学部）の総理は兼任で開成学校総理であった加藤弘之があたった。つまり当時はまだ二人の総理の合議体であった。明治一四年になって東京大学の職制が改められ初めて「総理」の席ができ、加藤がこれに就き、謙斎は総理心得となった。また医学部総理は医学部長と改称され、三宅秀が就任した。謙斎は明治一四年六月一五日まで四年余にわたって初代東京大学医学部総理をつとめた。つぎの三宅は医学部長であるから、医学部総理という名の職に就いたのは謙斎ただ一人であった。なお当時は講座制になっていなかったこともあろうが、彼は教授の座には就いていない（明治一〇年当時はまだほとんどを外人教師に負っていた）。

明治二一年五月七日、学位令によるわが国最初の医学博士五名が誕生した。池田謙斎、橋本綱常、高木兼寛、三宅秀、

大沢謙二の五名である。謙斎が医学博士第一号とされる所以である。

さらに彼は侍医・侍医局長・宮中顧問官などを歴任して、わが国の近代侍医制度の基礎を築いた〔朝倉治彦編『明治官制辞典』（昭和四四年）によれば〈宮中顧問官は一五人以内（一等官並三等官）。帝室の典範儀式に関する事件につき諮詢に対し意見を具上す〉（五〇七頁）とある〕。

また陸軍一等軍医正（大佐にあたる）という軍医の要職に就き、わが国の陸軍軍医制度の草わけの一人となった。明治三一年には男爵を授けられ、錦鶏間祗候を命ぜられている。大学（文部省）宮内省・陸軍など各方面に顔のきくエリート官僚であり、スーパーのボスであった。

明治三五年　第一回日本聯合医学会総会（田口和美会頭、現在の日本医学会総会にあたる）でつぎの一三人が名誉会頭に推薦されたが、その中にはむろん謙斎が入っている。

エルウィン・ベルツ、石黒忠悳、池田謙斎、岩佐純、橋本綱常、長谷川泰、高木兼寛、長与専斎、松本順、佐藤進、佐々木東洋、実吉安純、三宅秀〔『第一回日本聯合医学会誌』（明治三五年）より〕。

神谷昭典著『日本近代医学の定立』（医療図書出版社、昭和五九年）の中で紹介されていることに長谷川泰の済生学舎が明治三六年廃校になったのは、長谷川が単科医科大学の許可を文部省に相談したのに拒絶され、池田謙斎男、芳川顕正伯を以てその時の文部大臣菊池大麓に申し込んだところ、改築したら医学専門学校に許可するということであった。しかし結局これはならなかった。同書ではこれについてつぎの入沢達吉のコメントを加えている。

「我輩の親類の池田謙斎などはボンヤリしている人間だから、長谷川先生の云ふことを真にうけて頻りに文部省に使いをしていた次第さ」

ちなみに長谷川は新潟県の出身であり、謙斎・達吉のいずれとも親しかった。

また神谷氏は、石黒忠悳が東京大学医学部の総理心得となったが、これは総理の謙斎とともに東大医学部のトップの座が陸軍関係者により占められたことを示すものであると指摘している。

ドイツ留学について

謙斎は明治三年末に官命によりドイツ留学に出発している。わが国に最初のドイツ人医師ミュルレル、ホフマンの二人が来着したのは明治四年であるから、謙斎の出発はこれより早かったことになる。このとき謙斎と一緒にプロシャに留学したのはつぎの者とされる。

長井長義、大沢謙二、山脇玄、岩佐新、大石良乙、相良玄貞、木脇良、萩原三圭、青木周蔵、荒川邦蔵。

この名前は中野操『日本医事大年表』によったもの（一九九頁）であるが、謙斎の『回顧録』では以下のようになっている。

「薩摩の尾崎平八郎、佐賀の大石良悦（ママ）、相良元貞、長州の荒川邦蔵、外に北尾次郎、大沢謙二、越前の今井巌、山脇玄などといふ面々」

これでみるかぎり、尾崎平八郎、北尾次郎、今井巌の名が『日本医事大年表』にはないことになる〔注　石附実『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房　昭和四七年）の〈明治第一期（元―七年）の海外留学者〉のリストによればこの三人はつぎのように記されている（抄出）。尾崎平八郎　出発年　四年、東校派遣、「舎密学」森（注、有礼）に同行したのち独へ。北尾次郎　出発年　四年、東校派遣、「物理学」ゲッチンゲン大学入学。今井巌　出発年　三年、東校、「生理学」森の渡米に同行した。留学国　独。すなわち三名ともドイツへ官費留学しているが、出発年などに異同がみられるようである〕。

『東京大学医学部百年史』には「明治三年一〇月、九名が留学を命ぜられた」（二〇頁）とあるが、他方では『日本医事年表』と同じ一一名の姓名が記してあり（一一二頁）、これは恐らく同年表から引用されたものであろう。ただしここでは佐

藤進（医師のドイツ留学第一号とされ、明治二年渡独、当初私費であったが、謙斎らの留学のときに彼も国費支弁に改められた）の自伝の明治二年九月一〇日の項に、ベルリンで青木周蔵、萩原三圭に会っていることが紹介してあり、しかも彼らは約一年前から来ていたというのであるから、明治三年の出発者には含まれない。そこで青木・萩原を除いた上述の九名という数字が出てきたのかもしれない。『明治官制辞典』でも〈九名が留学を命じられた〉と記している（一八頁）。とにかく謙斎らは国費によるドイツへの医学留学の初めであった。

明治三年当時、謙斎は大学の大助教兼少典医であったが、留学を命ぜられると同時にその本官兼官を免ぜられた。出発のさい大学からの要求は、もう年もとっている（注、二九歳）から、むつかしい学科の研究は大抵にして向うの医科大学の組織視察を主に、傍ら自分の専門にしている衛生科を習うつもりで二年位も行っていたら宜かろうということであった。しかし実際には明治九年まで六年余も滞在し、明治八年にベルリン大学で「ドクトル」の試験に合格している。『回顧録』の最後に当時彼が学んだベルリン大学の教授名をあげているので引用しておこう。

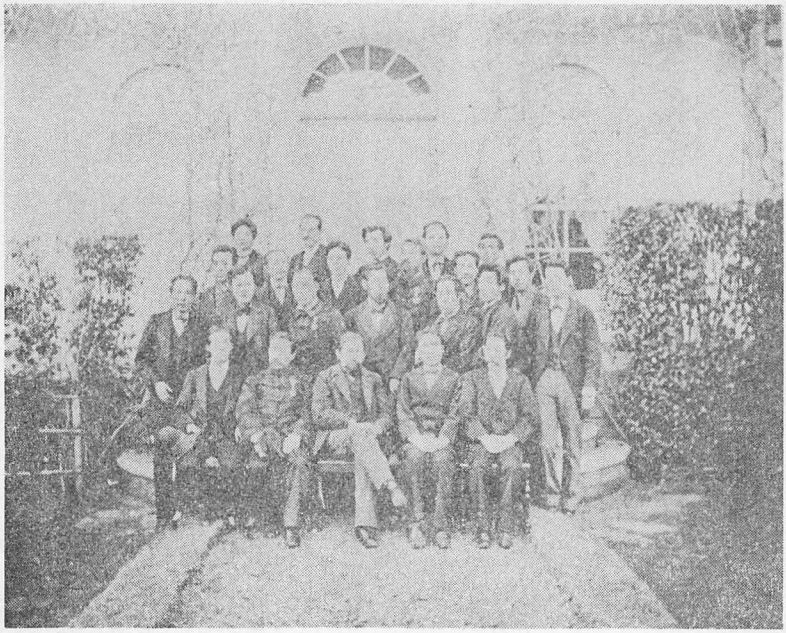
ウイルヒョウ（病理解剖）フレーリヒス（内科）トラウベ（内科）ランゲンベック（外科）バルデレーベン（外科）デュボア・レエモン（生理）ライヘルト（解剖）マルチン（婦人病）ヘエノホ（小児病）リーブライヒ（薬物学）レエウィン（皮膚病学）シュワイゲル（眼科）

謙斎は明治九年五月に印度洋を経て帰朝したが、その七月には東京医学校長長与専斎が米国出張するにつき、謙斎が校長代理とされた。

なおベルツがわが国に来たのも同年であった。

謙斎の写真

堀江論文に高崎斐子氏提供の謙斎の写真が登載されている。一枚は大正五年春のもので文官大礼服着用のものである



〔写真３〕シュルツエ帰国のさいの写真。前列左より
２人目が謙斎（『桔梗』より）

〔写真４〕写真３の部分拡大。左端が池田謙斎

（写真1）。これと同じものが緒方富雄氏の『医学のあゆみ』論文の巻頭にも掲載されている。他の一枚は爵位服（男爵）着用のもので、葬儀のさいに用いられたものである。これは『東京医事新誌』の訃報にも付せられている。朝日新聞の訃報の写真はこれらと少し異なり、やや若いときのもののようにみえる。

謙斎とほぼ同時代で、彼のあとをついで医学部長となった三宅秀（一八四八―一九三八）についての諸資料などが孫（三宅典次氏）らの手によってまとめられて上梓（福田雅代編、『桔梗――三宅秀とその周辺――』昭和六〇年）されたが、そこに紹介されている数多い写真の中に一枚、それに付された説明により謙斎と思われる者が含まれている集合写真がある（写真3、4）。すなわち〈此写真ハ「シュルツエ」教師帰国送別ノ際撮影セシモノニシテ即チ教師ノ左ニ着席セラルルハ桐原先生ナリ。教師ノ右ニアリテ軍服ヲ着セラルルハ池田先生ナリ〉とあるのがそれである。（今回改めて三宅典次氏、酒井シヅ氏により謙斎であることを確認下さる）。ちなみにシュルツエ Emil August Wilhelm Schultze（一八四〇―一九二四）は明治七年、ミュルレルの後任として来日、同一四年四月に退任したもので、当時謙斎はなお医学部総理の席にあった。桐原は桐原真節で、明治一五年より第一医院管理（付属病院長）となった。

オランダで「ボードイン・アルバム」を発掘された石田純郎氏に謙斎が写っているものはないかとお尋ねしたが、長崎医学校の学生の集団写真があるが、謙斎の顔がわからず、同定できないとのことであった。なお「ボードイン書簡」にもあたったが、謙斎の名前は見出し得なかったそうである。

謙斎の一面

中野操『日本医事大年表』で謙斎の項を索引でみると一二項があげられている。そのうちのいくつかを資料として引用しておきたい。

明治元年一〇月　大病院（東京府所轄、院長ウィリス）医員　池田謙斎、安井清儀、奥山虎炳、佐々木東洋。

明治二年二月　医学校兼病院（取締　緒方惟準）病院掛　池田謙斎、石井謙道、奥山元省、水野三省等。
明治一五年九月二日　東京日本橋に避病院を開設し、東京大学総理心得池田謙斎院長を命ぜらる。
明治一九年二月　宮内省官制公布、省内に侍医局を置き局中に長官、侍医、医員、薬剤師を置く。池田謙斎侍医局長官に任じ、伊東方成、岩佐純、竹内正信、岡玄卿、原田豊、高階経徳、田沢敬興、高階経本　侍医に任ぜらる。
明治二六年三月　池田謙斎ら大日本医会を創立す。衛生医事に関する国家重要なる問題を審議するの機関とす。

明治一九年九月には医師の会として東京医会が発足し、会長松本順、副会長長谷川泰であったが、謙斎も常議員として参画している。

謙斎と東京慈恵医院ないし高木兼寛との関連は、明治一八年、民間の文庫としては初期のものにあたる成医会文庫（現慈恵医大医学情報センター）の設立委員に長与専斎、三宅秀、高木兼寛、エルドリッジ、ホイットニー、ヘボンとともに委員の一人となったことがあげられるが、堀江はさらに同一九年、有志共立東京病院で、資金を得るために婦人慈善会に意見書を送ったさいの連名者の中に謙斎の名があるとし、同二〇年、東京慈恵医院（院長　高木兼寛）と改称のとき、一一名の商議員の一人に謙斎が名を連ねているとしている。慈恵と宮中は縁が深かったが、それには謙斎もいささかの貢献があったのではないかと堀江は述べている。

未開拓の謙斎研究

堀江はその論文で、謙斎に関することが、入沢達吉編の『回顧録』やのちにこれを現代訳・解説した緒方富雄氏のそれ（この中には謙斎から緒方惟準あての明治四二年元旦の手紙を紹介しておられる）を除いて、あまり調査・研究されていない点を指摘し、〈ドイツ留学、又は交遊関係について知られていることは極めて少ない〉〈侍医となってからは殆ど歴史の表面に出

て来ない〉〈後半生について語られることは甚だ少ない〉と記している。

謙斎はわが国医学教育・医療制度・侍医制度・軍医制度などの基礎を堅めた当時の超エリートであった。彼とほぼ同時代・同列の人をあげるとすれば長与専斎（一八三八―一九〇二）、石黒忠悳（一八四五―一九四一）、三宅秀あたりであろうか。たしかにこの三人に比しても謙斎の実態は知られているところが少ない。長与や石黒は自伝的なものを遺しており、彼にも『回顧録』があるが、せめて東京大学医学部総理の座をおりるころまでの回想を遺しておいて欲しかった。

医学専門書の執筆のないのも惜しまれる。ただし血縁の一人に入沢達吉のいたことは特筆すべきで、達吉は東京へ遊学したさい謙斎の世話になったが、謙斎は達吉を己の子のように扱い、熱心に訓誨を行い、私の今日あるは先生の賜であるとしている（碑文）。

さらに謙斎研究に寄与するものに彼の書簡が残っていたことと、一族が健在なことがあげられる。

謙斎の次女、斐子の話に、彼女が一六歳のとき四歳年上の兄友五郎とともに腸チフスに罹った。父と入沢が診察した。六月末から九月頃まで病床にあり、入沢がもってきた寝風呂に入れられ氷で冷やされ、熱が四〇度Cから下って頭がモーローとした。その時、父は平清盛のようだといっていた。また謙斎がドイツから自宅に送った現存する手紙について「父の手紙は金の話ばかりで嫌になる」と話した由だが、当時の留学はかなり費用が要ったのと、養父の負担をいくらかでも軽くしようとする心づかいもあったのではないかと堀江は記している。『回顧録』の中でも池田家へ養子に行ったのも長崎へ勉強に行く費用を出して欲しいことが一因であったし、その後留学にさいし、あとに残した家族の生活が心配でぎりぎりまで出発することをいいださなかった。しかしそのことを聞いた養父（玄仲）は、当時すでに隠居していたが、種痘所へ出勤して家計を助けるといってくれたので、安心して出発できたと述べている。またこれも斐子によれば、謙斎あてに来た手紙で斎が斉になっているのをみるとこれはサイではない、セイだといって気にした由。

このように私的な面、家庭では謙斎も平凡な市井の人であったことが判り、親しみがもてる。堀江論文では謙斎の書簡

も一部紹介しているが、これは一族により出版される伝記に収録されると思うのでここでは触れない。

なお謙斎の出身地、新潟県南蒲原郡中ノ島村には生家が残っており（鈴木才子氏による）、またヒゲ塚と招魂碑がある（藤井正宣・蒲原宏氏による）由である。

とにかく維新期をたくましく生き、わが国近代医学の源流の形成に大きく寄与した謙斎のことが、堀江氏や謙斎の一族の手によって明らかにされ、あるいはされつつあることは意義のあることであり慶ばしいことである。しかし堀江のいうように、なお未知の部分も多い。その評価も含めて今後の研究に待ちたい。

最後に私事を書き添えることをお許し願いたい。昭和五九年秋、小生は未知の人から電話をいただいた。それが鈴木才子氏であった。折から刊行された平凡社の『大百科事典』（昭和五九年）に小生が池田謙斎の項を担当しているのでということであった。迂闊にも小生はそれを執筆したことを忘失していた。小生は謙斎についてほとんど知るところがなかったのに、割りあてられた他の何人かの医人とあわせて苦しまぎれの原稿を送ったことを思いだすまでにはいささかの時間を要した。執筆時はむろん堀江先生による調査・研究のことも知らなかった。お電話によって遅まきながら謙斎について関心をもつようになり、堀江先生の友人であった古川明先生に会ったときに、医史学雑誌に堀江先生の遺稿を続稿として登載されることをお願いしたりした。

ところが逆に古川先生から、堀江論文を渡すので、自由に謙斎について再構成せよとの申し出をいただいた次第である。なお、上記事典の拙稿を見直すと東京大学医学部総理とあるべきところを東京医科大学総理と誤っていることにも気付いた。この場を借りて訂正しておきたい。

謹んで本稿を堀江健也先生の霊に捧げるとともに、鈴木才子氏、古川明先生に感謝の意を表します。

（大阪府豊中市、皮膚科）

Kensai IKEDA, Supplement

by

Yoji NAGATOYA

Kensai IKEDA (1841-1918) was born in Niigata Prefecture as the second son of Kenzo IRISAWA. He went to Tokyo and studied under Koan OGATA at "Igakusho", the school of medicine run by the Tokugawa Government. Soon Koan died, but Kensai became his adopted son for the sake of formality (the family register showing this still exists) and then became an adopted son of Genchu IKEDA, medical officer of the Tokugawa Government, who came from Shimane Prefecture. In 1864 he went to Nagasaki and studied under Antonius F. Bauduin. In 1870 he went to Germany to study, and after coming back to Japan he was appointed the first president of the medical school of Tokyo University. He became the first Doctor of Medicine in Japan in 1880, also held the positions of Army Surgeon and Court Physician and contributed to the foundation of medical education and treatment in Japan.

He left "Memoirs" (1917), but no satisfactory research study of him had been undertaken until his letters were recently found and deciphered by his family. Meanwhile Kenya HORIE conducted research concerning his career which was regrettably discontinued because of HORIE's death.